

総動員伝道

総動員伝道の目標

1. すべての人に福音を伝えよう。
2. すべてのクリスチャンがよいあかし人になろう。
3. すべての教会が成長しよう。

収穫のための働き人

総動員伝道 委員 福澤満雄



「収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫の主に、収穫の為に働き手を送ってくださるように祈りなさい」。

(マタイ九・35～38)

◎夏の働きも終わり、収穫の秋を迎えました。霊界も収穫の時を迎えています。7月にミネソタの娘婿の実家に行ってきました。とうもろこしと大豆の畑が、気が遠くなるほどの広大な土地に広がっていました。しかし、畑の最大の飼料は農夫の足だ、と言われました。朝夕欠かさず見て回るのです。収穫の方法は35節にあるように、全ての町や村を巡り歩く足が必要です。ですから、良きことを告げる者の足は麗しいのです。

◎収穫の為の働き人の心は、36節、現実を見てどのように感じるかです。

収穫の手段は、やはり人です。どんなに機械化されても、コンピューターの時代でも、魂の収穫は、聖霊に満たされた、滅び行く魂への愛と情熱(パッション)を心に秘めた人です。

◎巡回伝道者として、国内を回って今、感じることは、本当に働き人が少ないということです。年々、牧師のいない教会が増えていきます。このままですと、10年先が思いやられます。若い献身者が、もつと多く起こされるように、祈りましょう。この春、大阪のある神学校で伝道学の講義を頼まれて行ってきました。なんと、12人の生徒のうち11人が韓国から来た、若者達でした。日本人は女性1人でした。

◎献身の志をもっている人は、沢山いるのです。しかし、その多くの人は

既成の伝統のある神学校ではなく、TJのような通信教育でも学べる神学校に入っています。私が献身した40年前の神学校は、学歴の無い私のような者でも、受け入れてくださり、一生懸命、いのり、勉強すればついていける内容でした。しかし、今でしたら私はどこの神学校にも入れないでしょう。入れたとしても、とてもついていけないと思います。英語も、ましてやギリシャ語やヘブル語には、手も足も出ないで、落第です。神学校の教授や学者を教育するコースと伝道者や牧師を教育するコースを別に考えてほしいと思います。

◎最後に、収穫の働き人は38節にあるように、主が送り出してくださいます。これは、明確な召命(使命)感です。これが無くては、困難や誘惑に打ち勝って、この勤めを全うすることは出来ません。この使命感があっても、多くの伝道者や牧師が誘惑に負けて、第一線から退いていくのです。また、定年後の第二の人生を捧げてくださる信徒の働き人が、多く起こされるように、祈りましょう。

トラクト配布の効率

このところ毎年、総動員伝道ではトラクト配布を実施してきました。今年三重県志摩市に配布しようとしています。地元の教会の方から「この地方は伝道の難しいところで、トラクトを配布すると受取人払いで返送されてきます」とのご意見をいただきました。さっそくトラクト配布を専門とするEHCにその対策について相談しました。ところが意外なことに「そのような反応を経験したことはありません」との返事でした。

先日、中国

地方で伝道研修会をいたしました。その時、「ト

ラクト配布は害あって益なしだから、辞めたほうがよいと思う」という意見が飛び出しました。そこで三重県の意見を紹介すると同じ経験をしたとのことでした。

福音の種を蒔くか蒔かないかは、こちらの問題で、それを受け取るか、破って捨てるか、受取人払いで返送するかは相手の問題です。聖書には種まきの話が出てきます。それに「水の上にもパンをまけ」（伝道者十一・1）と効率の悪さを度外視して、あれが育つか、これが育

つか分らないのだから、とにかく福音の種を蒔くようにと勧めていると思います。

電波伝道は不特定多数の方々へ福音を伝えることが出来ます。文書伝道、とくにトラクト配布伝道もそれに近いと思います。しかし地域を設定したトラクト配布はあの意味では、不特定ではなく特定された地域の人々に伝えようとするのです。その地域の人々にあつた内容の物、配布の仕方にも工夫が必要かもしれません。無断家宅侵入というような問題に巻き込ま

伝道メモ

54



れないようにする注

意も必要です。

教会のない地域で

は、福音に接する機会がほとんどありません。都市のように教会があつても関心のない人には接するチャンスはないでしょう。

一軒一軒訪ねてトラクトを配布することは、そのチャンスを提供することになり、どなたかが目に留めてくだされば、さらに一歩前進です。犠牲と忍耐のいる作業ですが、人々の救いを願って歩き続けているのです。イエスも「ほかの村へ行かねばならない」（マルコ一・38）とおっしゃっておられます。さあ、あなたも福音の種まきをしましょう。

教会を
建てる喜び

32

(信徒のためのセミナー)

小助川 次雄

第七課『教会形成』の実践プログラムの例(その3)

二、教会の現状の分析結果の取り扱い方(前号からの続き)

このような分析で得られた結果はあくまでも参考資料です。数字は正直とも言われますが、統計は、すべて、ある条件の下でなされている作業ですから、そのまま一般化や絶対化をしてはいけません。ある手順によれば、こういう見方もできますということですので。以下は要点です。

① 非難や責めるためではなく、現状を一面から知るために用いる。まずありのまま、うけとめる。

② その上で、何か反省し、あるいは、推進する点や事項はないかを考える。(以上が繰り返し)

自分たちの教会の数年間の数的統計や教会活動等との関係の資料を見ますと、そこには「変動」がみられます。その変動の見られる頃に、教会ではどんな活動(イベントも含めて)がなされていたかを見ます。そ

して、その変動に何か特徴や傾向が見られるか吟味します。

大きい例では、ピリー・グラハム師のクルセードが勇ましく各地で展開された当初のころ、日本の各地で「教勢」が伸びているという報告があります。とにかく、福音の伝道が盛んでした。そして、それなりの実を結んでいたと言えます。

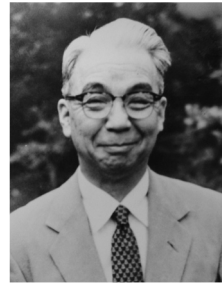
しかし、すべてのことが「原因——結果」で決めることはできません。宣教(伝道と教会形成)は、一義的には神のみわざだからです。ただ、神は、「人」を用いてそのみわざの多くの部分を実行されます。その記録が聖書にあり、教会の歴史にあります。ですから、聖書に学び、歴史にも学んで、なお託されている宣教の使命を果たすように、祈り、励むことが大事です。

また、この場合、私たちのしていることや今ある状態は、聖書にかなっているか、また、歴史から霊的、実際の教訓を学んでいると言えるのかどうかを、吟味することにもなるのです。これを実行することは、言葉で言うほど容易ではありません。ですから、なかなか反省や改善まで進めません。残念なことです。

もし、少しでもこれを心がけるならば、各教会は、必ずや、さらなる祝福が加えられると確信いたします。

◆小島伊助と日本伝道

関西聖書神学校校長 工藤弘雄



聖霊との親しき交わりの中で生涯独身を貫き、主の臨在の輝きの中で生涯と奉仕を全うした小島伊助は福音のもたらす恵みがどれほどのものかを身をもって証明した。「日本のクリスチャンよ、恵みに徹せよ」。日本伝道に果たした小島の役割は福音の徹底にあった。

新生と聖潔

小島は1894年（明治27年）、千葉県銚子市に誕生。ヘフジバ・ミッシヨン宣教師ミス・グレンらの働きの中で9歳にして新生、11歳にして家族と共に利根川河畔にて受洗。小島家全家の救いにはミス・グレンの他、都田友次朗、御牧碩太郎、笹尾鉄三郎、パジエツト・ウイルクス、竹田俊造らが関わっている。1915年（大正4年）

青山学院英文科を卒業後、日本伝道隊神戸聖書学校に入学。教師陣には竹田俊造校長、これを助けるウイルクスと諸日本人教師、さらに時あたかも10余年ぶりに再来日したバックストンもいた。学友には拓殖不知人、舟喜麟一、野畑新兵衛、佐藤邦之助、佐野茂理治、森俊治などがいた。聖書学校在学中、ソントンの通訳のため四国は松山へ。数日間宿舎に滞在中、ガラテヤ五章24節の磔殺が貫かれる。さらに徹底した服従、明け渡し、全く空しくなった魂に圧倒的な聖霊のお臨み。「わが証し、四国は伊予の松山で、ガラテヤ五章24節」と詠むほどに、肉の磔殺と聖霊によるパテスマとその結果としての内住のキリストの恵みは小島の全生涯を貫いた。

巡回伝道と聖書学校教師

聖書学校卒業後、しばらく母教団ヘフジバ・ミッシヨンで働く。1921年（大正10年）、27歳の若さで巡回伝道者に。最初の奉仕が御牧碩太郎講師来たらずの大阪泉尾での聖会。「なんじらのうちになんじらの知らぬ者ひとり立てり」（ヨ

ハネ一・27）の圧倒的な主の臨在は以後の小島の奉仕の原点となった。ソントンの通訳の奉仕に10年、イソウードの傍らに立つこと99回、通訳者としても用いられた。1924年（大正13年）、神戸の御影に日本伝道隊聖書学舎が新たに起こされるや、澤村五郎校長と共に専任教授として奉仕された。1937年（昭和12年）、バックストン最後の来日の全聖会に通訳の奉仕。その後、第二次世界大戦中も澤村と共に灯火管制の下、御影から塩屋に移った聖書学舎を守りとおした。

日本イエス・キリスト教団設立

終戦後1946年（昭和21年）、日本イエス・キリスト教団の濫觴とも云える「日本伝道会」に「心安かれ、我なり、恐るな」のみ声は響き、新たな出発。聖書学舎も澤村、今村共同の神戸神学塾を経て今日の関西聖書神学校へ。小島は戦前戦後終始一貫、澤村と共に伝道者養成の働きに献身。霊的機関誌「福音」主筆、牧会、巡回伝道と東奔西走。1951年（昭和26年）、日本イエス・キリスト教団結成。「我自ら汝と共に行くべし」（出エジブ

ト三三・14）の聖言に立って初代委員長に。同教団のみならず「福音」や聖会の奉仕とおし、戦後の福音派の諸教団や北米、南米の邦人教会にも多大な感化を与えた。

「小島伊助全集」と晩年

1983年（昭和58年）、「福音」を基盤にいのちのことは社から「小島伊助全集」全7巻が出版。1991年（平成3年）には第1回福音功労賞に顕彰された。晩年、失明されるも、霊眼はいよいよ冴え、受肉した福音の権化、内住のキリストの証人、聖化した聖徒として輝ける主の臨在に包まれ、晩年を全う、1992年（平成4年）栄光の天に移された。

小島の日本伝道に及ぼした影響は大きい。本田弘慈をはじめ幾多の伝道者に多大の感化を与え、また、「福音」誌や聖会をとおして日本の宣教を深めた。小島の恩師バックストンに見る宣教の高さと深さ、また超教派性に見る広さは、畏友澤村五郎と共に最も良くその奉仕と生涯に表されている。彼は死すれど、その信仰は今なお語っている。

山口での講習会

去る6月6、7日、山口福音教会を会場に県下の牧師たち、20名が集まり、講習会が持たれた。西日本総動員伝道以来、県民救霊新祷会がもたれている。そこに参加しておられる方々を中心に会合が持たれた。

今回のテーマは「1%の壁を破るには」。山口県は姫井師にとって懐かしい伝道の古戦場である。しかし当時の牧師は松田師ひとりになっていた。そこで姫井師は開拓伝道のあかしと総動員伝道の目的、今回の講習会の目的を話した。同行された三谷康人師は、エリヤ会のアンケートから「1%の壁は何であるかを説明。さらにこの壁を



破るにはどうしたら良いかを提案した。夜の会合は一般にも公開としたので、80人ほどの人々が集まった。三谷師が「逆転人生」をあかした。翌7日は午前中に姫井師と三谷師がそれぞれのテーマにそって講演。午後、2時間を懇談の時とし、山口県での「破る方策」を協議した。結局、「牧師の変革が求められている」という結論に行き着いた。内向き思考から外向き思考への転換、賜物に応じた信徒の総動員、牧師の役割など真剣に話し合われた。牧師の変革に関しては「いろいろやってきた。早朝祈禱、断食祈禱、徹夜祈禱、韓国の祈禱院にも行ってみた、徹底した献身、聖化、諸伝道方策の実施、とにかく主のみ前に忠実にやれることはやってきた。なのに」と絶句される赤裸々なあかしもあった。

秋の『伝道研修会』のご案内

◆日時 2005年9月16日(金) 夜 7時～8時30分

◆会場 総動員伝道事務所OCC 614号室
◆講師 趙 南洙牧師 (日本同盟基督教団・招待キリスト教会牧師)
※参加費 1,000円 (資料代含む)
《講演内容》

○発題

『韓国宣教師から見た日本の教会』

趙南洙先生は韓国で堅実な教会形成をされ、群も大きく成長していました。そんな時、日本宣教の召しを受け、来日され、現在、日本同盟基督教団・川崎招待キリスト教会の牧師として精力的に奉仕しております。

今回、趙先生には『韓国の宣教師から見た日本の教会』と題して、韓国でやってこられたこと、日本で行ってこられたこと、韓国と日本の違い、先生の伝道スピリットなどお話し頂く予定です。期待を持ってお出かけ下さい。



趙南洙先生

(1月28日に行った大嶋義隆先生による伝道研修会の資料もあります。)

●ご支援、感謝いたします。

無事、志摩市のトラクト配布を終えることが出来ました。韓国・多雲教会からの奉仕者は決められた5千枚を配り終わるまで帰りませんと日が傾いてからでも配布を続けてくださいました。20万円の必要が満たされるようご協力ください。

千葉県西地区の牧師会(いのちの泉会)では「葬儀」の課題を焦点に懇談の時を持ちました。貴重な意見を交換し合う事が出来ました。

5-6月会計

収入	313,140	484,750
活動費	34,186	196,456
ニュース印刷発送	134,889	134,751
部屋代	195,135	195,337
人件費	0	0
積立	10,000	10,000
支出計	374,210	536,544
累計	-151,419	-203,213

2005年9月1日発行
〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台2-1
OCC、614号室

総動員伝道
03-3291-5035
03-3291-5266
Eメール sodoin@ybb.ne.jp
ホームページ
http://www.gospeljapan.com/sodoin/
振替 00140-1-107255
代表 姫井 雅夫
編集 住吉 英治
定価 1部10円 (送料別)
印刷 新生宣教団 (2,500枚)